

序——ジャコモ・バッラの「家」

本書はテーマごとに四つに分かれ、全十四章から構成される。すべてがその時々に関心に応じて書かれているため、基本的にはどこから読んでいただいても構わない。まずはその全容をかいつまんで紹介しておこう。

第I部「芸術——未来派の知覚」は三つの章から構成される未来派論である。第1章「ローマ——革命の都市／教育の革命」では本書のタイトルでもある「糸玉」という語の由来が、二十世紀初頭のローマを舞台として明らかにされる。芸術、建築、教育の三つの領野が相互に連動しつつ、刷新的なプロジェクトがこの都市で次々と実現していく過程が論じられる。未来派とはそもそも、そうした土壌で培われた運動体であった。第2章「動体写真という反証」では、未来派において不遇であったフォトダイナミズモという写真表象が、かえって造形芸術の理論を先鋭化させたという説が検証される。第3章「ウンベルト・ボッチョーニの彫刻、ロベルト・ロンギのエクフラシス」は、現代のテクノロジーで蘇った彫刻作品を、かつて言葉によって見事に射止め

た美術史家の「まなざし」への考察である。

第Ⅱ部「万博——うたかたの都市」には、第二次世界大戦で果たされなかった未完のイベント「ローマ万国博覧会」に関する三つの章を配した。第4章「ローマ万博の光と影——ジュゼッペ・ボッタイのまなざし」は、万博開催に向けた準備段階にスポットを当て、背景にあるイタリア固有の事情を論じた。そのなかで鍵になる人物は、前著『イタリア・ファシズムの芸術政治』（水声社、二〇一一）でもクローズアップしたジュゼッペ・ボッタイである。彼の言説に暗示される「地層」のイメージは、本書にとつて大きな示唆となったことを率直に打ち明けておきたい。第5章「建築家アダルベルト・リベラの記憶」と第6章「幻のなかの経験——ローマ万博の展示空間」はともに、実現した建築物を舞台としている。だが、それらはいわゆる建築史や形態論に依拠したものではなく、再発見／再活性化された事実や資料に基づくものである。また、筆者自身のミラノ万博体験（二〇一五）や二〇二五年に予定されている二度目の大阪万博も各論を執筆する動機となった。

作品を論じるにあたって改めてテキストを丹念に辿るといふ姿勢は、第Ⅲ部「建築——後期モダニズムの消息」でも一貫している。戦後イタリアの社会状況を軸として、建築が文学や知識人といかに関わっていたか（第7章「イタロ・カルヴィーノ『遠ざかる家』と戦後イタリア建築史」）、あるいは機能主義という概念が各時代でいかに内実を変化させたか（第8章「機能主義建築の臨界——後期モダニズムにおける人間的なるもの」）が、関連するテキストの分析によつて探られることになる。第9章「近代運動」のパリンプセス——トッレ・ヴェラスカとその建築論」はこれらふたつの章の考察を経て書かれた。よつてこの章は、筆者にとつて建築論の集大成でもある。各章単独でも理解しやすいように加筆はしたものの、第Ⅲ部だけは章順に読んでもらうのが正しいのかもしれない。

「技芸——かたちの声」と題された第Ⅳ部だけは、地域も時代も主題もそれまでとはまったく違った内容であ



図0-1 カーサ・バッラ内観、書斎

る。幸運に恵まれて出会った作品や人物が取り上げられている。細々とイタリア近代美術の研究を続けてきた筆者だが、ここ数年のうちに（常勤職を得たことにも勢いを得て）専門性の囊にくるまっていいのかと自問するもうひとりの自分がいることに気づいた。収録された五つの章には、悪ふざけと思われても仕方のないような主題やタイトルや言い回しが散見される。しかし書いている本人はいたって本気である。そして、関心に応じて書いていくにつれ、自分がどうやら二十世紀という時代に関わるものに惹かれていることに気づいた。最後の二章は、まだ二十代の若い作家についての論考だが、彼らの作品にもやはり「あの時代」の余韻が^{こぼれま}びしている。いや、半ばそうであって欲しいという願望も込めて、副題を「かたちの声」とさせてもらった。

さて、喩えるなら、本書には十四の扉があるわけだが、どこから入場しても同じ所に通ずるような面がある。そのことを明らかにするのに、格好のメタファーであり、かつ実例となってくれるのが「カーサ・バッラ」である。

それは、未来派の芸術家、ジャコモ・バッラが一九二九年以降、愛する家族と暮らした家である（図0-1）。ローマの歴史地区からみれば北東部に位置する住宅街にあるこの家は、世がコロナ禍に喘ぐ二〇二一年に公開された。バッラの二人の娘が他界した後、手つかずのままだったこの家が、